

佐々三雄素描

都 築 久 義

はじめに

平野謙は、晩年にまとめた大著『昭和文学私論』の一節で、「むかしから、私小説を中心とする文学史を書く機会があったら、必ず佐々三雄について何ページかを割かねばならぬ、と私は思っていた。」と述べ、「私は一時期佐々三雄というほとんど無名にちかい作家の『献身』という処女小説集を、くりかえし愛読した」と、回想している。が、平野はその文学史を遺さぬままこの世を去った。

新人発掘の名手といわれた浅見淵は、さすがにいちはやく彼の才能を発見し、彼を世に出し、夭折を愛惜するエッセイを数多く発表したが、浅見もまた佐々の伝記面までは言及しなかった。

おそらく、現在、佐々三雄の全体像を知り得る公刊された唯一の文献は、講談社版『日本近代文学事典』の野村尚吾の執筆文だけであろう。出生地に誤記があるが、三十行たらず、六〇〇字の記述がいまのところ彼の輪郭を伝えているたった一つの資料だと思う。

私がかねがね、昭和十年代文学や戦時体制下の文学者に関心を寄せ、一方で郷土作家とその文学にも注意をはら

ってきたが、たまたま昨年（昭和五十三年）の春、名古屋の新聞社が企画した「近代文学百人展」に参画し郷土文学関係を担当した際、地元作家・木全田寿氏のご教示で実は初めて佐々三雄の存在を知り、以後この無名の作家を追い、資料を探索してきた。

幸いこのほど、三雄の姉にあたる熊沢金子さん、未亡人の佐々みつ子さん、生前親交のあった鍛冶賢雄氏に親しくお話を聞く機会を得、その他大勢の方から有益なご協力をいただくことができた。むろんそれだけでは佐々三雄の全貌は明かにできないが、ここではひとまず彼の素描を試みたいと思う。

一 佐々三雄の文学

佐々三雄の文学的生涯は、昭和十年一月の「峰」（『早稲田文科』）に始まり、二十二年三月の「巡礼」（『風雪』）に終る、わずか十余年である。この間、世に出た創作集は、昭和十三年十一月に赤塚書房刊の『献身』一冊。発表した創作も、現在、判明しているのは二十六編。このうちいわゆる一流文芸誌に載ったのは、昭和十七年十二月号『新潮』の「昔の人に」が一作。各種文学賞の受賞はもとより、その候補にのぼった作品もない。強いてその種の榮譽に輝いた例をあげるとすれば、雑誌『作品』が、昭和十一年一月号の第一回新人コンクールで同人誌作家七人を同誌に掲載したとき、『早稲田文科』を代表して彼の「片雲」が載ったことくらいであろう。まことに彼の文学的生涯も短かったが、活動もささやかなものだった。

作品は一貫して私小説。それも、「家」や「幼年の街」など、二、三の回想的自伝を除けば、大学時代に知り合っただけの同棲を始めた「年上の女」と、彼女との間にできた一人娘をめぐる身辺雑記を綴ったものが大部分を占める。しかも格別な事件や話題があるわけではなく、孤独で物憂い男の心境が、家族の動向のなかで語られているにすぎ

ない。全く平凡といえは平凡な作品ばかりだ。

しかし、別の観点にたてば、昭和初年のマルキシズム旋風を青春時代にまともなうけ、多くの同世代の者がその渦中に身を投じた折にも、「彼はひとり光輝ある孤立を持ちながらひそかに天邪鬼の快味をかんで超然」（「献身」）としていたし、あの一億国民があげて興奮した戦争の時代下にあっても、「彼はまるでさういう時勢に逆批例してでもゆくやうに、そのこらいよいよ誰訪れるものもなくなつた京や大和の森閑とした古寺の境内に、恰かも遠くからきた旅のひとのやうに、茫然と佇んでみるのを樂しみ、暫くは寺から寺へ巡礼のやうに日を送」（「巡礼」）という、時流に流されず、よく孤絶を守つたともいえ、孤高に生きた評価はあつてしかるべきであろう。

もともと彼は、「外面的な政治態勢や社会事変の連鎖とは全く別個に、歴々と人間心理の文化の歴史があることに、想ひを致さねばならない」と考え、「このみえない歴史こそ、真の人間の歴史であつて、もしもほくらが自身のなかに歴史を感じるならば、ほくらがはたさなければならぬものは、この現代心理の文化の究明でなければならぬ」（「新人は語る」）と固く信じていたから、政治状況がどう変ろうと、社会事変がどうなろうと、ほとんど関心の外だった。

彼のそうした生きざまと、その反映である彼の文学は、そうであつたが故に、たとえは戦後平野謙が告白したように、当時ひそかに愛読されていたとしても、浅見淵の例を格別とすれば、公然と評価されたり、たとい内心でどんなに共感しても話題とされることもなかった。

なぜなら昭和初年代や十年代には一つの思想や風潮が時代を席捲していたのだから、それに乗るかそれとも声高に批判するか、いずれにしる時代の風潮にかかわり、それに見合つた作品でなければ良くも悪くも話題になることはないからである。佐々三雄も時流に超然と生き、それを無視したが、時代の方もまた彼を無視したのである。

もし、佐々三雄の生きざまや彼の文学的姿勢の真価が発揮されるとすれば、昭和初年代と昭和十年代のそれぞれの時代を席捲した思想や風潮が批判され、検討され始めた戦後こそふさわしかったのだが、惜しいことにそのとき彼はすでにこの世の人ではなかった。

佐々三雄の文学を発掘し、再検討を加えるにはなお多くの時日を要するので、とりあえず、彼の主な文学的活動の舞台と彼の作品目録を掲げておこう。

『早稲田文科』

同人雑誌『早稲田文科』は、佐々三雄が処女作「峰」を発表した雑誌であり彼が初めて参加した同人誌である。講談社版『日本近代文学大事典』には、「昭八・一〇～一一・六。編集発行人大内義一。早大英文科在学生の宮内寒弥、市川為雄、森田素夫、寺尾博（寺岡峰夫）、大滝信一、斎藤良輔、前川修、藤田秋六らで創刊」とある。執筆者は市川為雄。早大英文科というのはいさし詳しくいえば、昭和十年三月卒業組である。他に、野村尚吾、桑原至らがあった。昭和九年十月号（第二卷第九号）の「回顧一年」をみると、斎藤良輔の名前がなく、長谷川周三半井田清介、中務保二、若林孝郎の名前が右以外に出ている。このうち中務保二は露文科だ。

佐々三雄については、創刊一周年直後の、昭和九年十二月号（第二卷第十一号）の「編集後記」に、

◇今度新しく佐々三雄と鷹樹英弘の兩人を同人として迎へた。佐々君の作品は今月都合悪く貰へなくて残念だったが、来月は力作を寄せる筈である。

と書かれている。佐々三雄の同人参加の事情は明かでないが、露文科の後輩、中務保二（昭和十一年卒業）の勧誘によるものではないかと推定される。

浅見淵は遺著『史伝早稲田文学』のなかで、わざわざ「『早稲田文科』の同人たち」の項目を設けて、

『早稲田文科』は、久し振りに出た重量感のある同人雑誌として創刊号から注目されていた。（略）さきに、作家が輩出する時というのは、必ず作家志望者がたまたま多く固まった時で、孤立して文壇に出ることは非常に稀だと書いたが、『早稲田文科』も、すでに紹介した『新正統派』に次ぐ多士落々の同人雑誌だった。昭和十年卒業組の英文科生と露文科生との集りだったが、創作の方では、英文科だった、野村、宮内の他に、露文科だった佐々三雄が囑望されていたものだった。（略）評論の方では、名著とっていい作家論集「文学求真」一卷を残した英文科出身の寺岡峰夫がいる。（略）いま田山花袋研究に没頭している市川為雄も英文科出身の同人で、初めのうちは『早稲田文学』にも時々時評的文章を発表していた。その他、才能あって大成しないうちに夭折した作家志望の同人も数人おり、『早稲田文科』が発刊された時には、初めにも書いたように、並々ならぬ期待を寄せられたものだ。

と述べ、野村尚吾、宮内寒弥、佐々三雄、寺岡峰夫の業績については特に頁を割いている。（佐々の同誌へ発表作品は別項に掲げた。）

『朱鳥』

同人雑誌『朱鳥』は、昭和十四年二月号と同十五年三月号の二冊以外は未見であるため詳しくは叙しえないが、『早稲田文学』の昭和十二年七月号所載の「六月号同人雑誌評」の冒頭に、

「朱鳥」物価騰貴、特に紙の暴騰に伴ひ、同人雑誌刊行に非常な困難を叫ばれてゐる所から、この雑誌の創刊には、少からぬ敬意と発展を祈る次第である。

との野村利尚（尚吾）の記述があることから推測して、創刊は昭和十二年六月頃ではなかったかと思う。一方、昭和十五年三月号の「編集後記」には、

僕たちは雑誌を出したかったのでありますが、どうも都合がわるくて去年中にたつた一冊しか出すことができないのでした。（略）朱鳥も永い間、休刊の状態でしたが、こゝに富山君の霊を悼んで、追悼号を出すことにしました。また、これを以て朱鳥も一先ず廃刊したいと思ひます。

と、廃刊宣言が出ている。「十四年中にたつた一冊」とは、おそらく十四年二月号のことであろう。とすれば、結局、『朱鳥』が継続的に出たのは、十二年と十三年、実質的には一年間だったのでなからうか。例の『早稲田文学』の同人雑誌評を追ってみると、十二年六月、八月（？）、十二月、十三年四月、六月、九月には発行された

形跡がある。

『朱鳥』の発刊事情も、創刊号を手にしていないこともあって、実はよくわかっていない。が、森田素夫が、『泉』について書いている一文（『早稲田文学』昭16・9）を読むと、『早稲田文科』廃刊後、宮内、市川、野村、中務、佐々、寺岡、森田らが『象徴時代』を出した。そして、『象徴時代』が「一号でつぶれると同時に、『発刊の辞』の執筆者中務保二は、佐々三雄と『朱鳥』を始め、残った者は半年余りの空白ののち、『泉』を始めた」という。一説には宮内寒弥と中務保二が大ゲンカをして仲間割れしたともいわれている。やはり、英文科中心の『早稲田文科』の面々とは、露文科の中務らは異和感があつたのだろうか。英文科の連中は、森田素夫も記しているように、『朱鳥』に遅れること半年、十二年十二月に『泉』を再び出した。

『朱鳥』の創刊同人に關しても明かにできないが、昭和十四年二月号に載っている同人は次のとおりである。

片岡武也 小島一司 小寺正三 黒川成一 鍛代利通 森 英夫 松井恭平 光田文雄 岡 勇 奥天英二
佐々三雄 佐賀一海 佐伯哲太 高谷好美 友田 豊 弓削正也
(以下は出征中) 吉田 弥 釜田定雄 工藤吉郎 中務保二 富山雅夫

右同人の一人、森英夫氏にうかがったところでは、このうち、佐賀、高谷、富山は早稲田ではなく、小島と弓削は記憶にないとのことである。もっとも、他は早稲田の關係者だといっても、片岡は政経、森は高師、佐伯は国文、岡は仏文といった具合に、出身の学部学科はまちまちであったし、光田文雄のように、三高を左翼運動で追われ、早稲田へ入り直したものの、ここもすでに中退し、先輩の尾崎一雄などといくつかの同人誌を渡り歩いていた者もいて、同人の顔ぶれはさまざまだったようだ。その点が早稲田・英文科で固った観のある前記『泉』とは極め

て異った雰囲氣を呈していたはずである。

『朱鳥』の編集兼発行人は、手許にある二冊をみると、「献身出版記念号」と銘打った十四年二月号が、岡勇。十五年三月号の「富山雅夫君追悼号」が、光田文雄。発行所は、前者が、淀橋区戸塚一ノ四五五、早苗別館、朱鳥社。後者が淀橋区戸塚一ノ三二一、光風館、朱鳥社。いずれも発行人の下宿である。

森英夫氏は「一番若手（昭和十三年卒）だったが、派振りのよかった岡勇が、ずっと編集長をやっていたと思うが……」と話された。十五年三月号の発行名義人はともかく、「編集後記」での廃刊宣言の署名には岡勇の名が記してあるから、森英夫氏の記憶のとおりであろう。

当時、森英夫氏も、この「献身出版記念号」に、「『献身』の著者」と題し、

彼は昨今一定の職業を持たうとする意志を私に洩らした。勤務先を持ちたい、といふのだ。その意志を他の会合の場所で洩らした折に、「さうすると良いな、勉強になるし……」と誰れか云つた。すると彼は相手を睨んで「俺は勉強するために勤めを持たう等思つてやしない／＼勤めを持つたら、遮二無二遊んでやらア」とひどく激した調子で云つた。双方の言葉の意味は、私に夫々解るのだ。ところでその後数日して家に寄つてくれた時具体的に就職の話が出た序でに、勤口を持っては卑屈にならなければならぬ事も多い、それは又それで生かす事も出来るけれど……、と自分の経験など話したのであるが、彼は「べつに勤めを持つて其処から小説を生み出さうなどといふ意志は毛頭ないのであつて……」と静かな口調で語つた。自分の言葉を別の意味にとられるかも知れぬ、と思ひ私は黙つた。

と、したため、佐々三雄の文学への厳しい態度がうかがえる。また、同誌には光田文雄も「佐々三雄に」を寄せ、ここにもその頃の『朱鳥』のなかまたちとの交際が点描されていて興味をそそられる。

今かうして読みかへすと、江古田で一軒をいて隣りに住み、毎日のやうに顔を合せてゐた頃の生活がまるで新鮮な絵のやうに浮んで来る。氷が張つてポンプから水が出なくなつたこと、よく雪が降つたこと。それから二人で火鉢を抱くやうにして徹夜した朝の朝刊で、牧野信一が自殺したことを知つて、顔見合せておち氣立つたことなど……

「猷身」の最初に出て来る「寂びれた郊外の、裸かの麦畑と、枯草のまばらに生えた空地に……」の家だつたのだ。

その頃の君は、まだ小さかつた邑子ちゃんを抱いて、寒さうな夕暮れなど、あの一面に麦畑と大根畑の見渡せる崖の縁によく立つてゐたものだ。しかし君はいつも寒々とした素足だつた。

あの頃、中務、岡、それから今は北支の方へ行つてゐる釜田とよく無茶な酒を呑んだりしたが、不思議にそんな君のさびしい印象ばかり残つてゐるのはどうしたことだらう。

光田文雄のことは、尾崎一雄の『あの日この日』にも頻出する。彼も佐々の『猷身』のあと同じ赤塚書房の新文学叢書の一巻として、昭和十四年三月、短篇集『南の海』を出版したが、やがて「大東亜戦争」で南方に出征し、そのまま還らなかつた。

この記念号に寄稿した者の名前と題を次に掲げる。五十六頁中、二十三頁がこれにあてられている。

私信に代へて

森田 素夫

「献身」の著者

森 英夫

献身する佐々三雄

宮内 寒弥

ひつくるめ佐々を語る

片岡 武也

美しき虚無の花園 —— 佐々三雄寸言 ——

高谷 好実

「献身」の作者

佐賀 一海

佐々君の「献身」

市川 為雄

佐々三雄氏

奥天 英二

佐々三雄君の「献身」 (※『文学求真』△砂子屋書房 昭15・7√に所収)

寺岡 峰夫

佐々三雄に就て

岡 勇

「献身」を讀みて

友田 豊

佐々三雄に

光田 文雄

「献身」と神の問題

馬場 京吉

佐々三雄君について (※『現代作家卅人論』△竹村書房 昭15・10√に所収)

浅見 淵

『献身』の体裁は四六判、フランス綴美装。無地の表紙に「献身」の二字。定価、八十銭。本文・一六一頁で収録作品は、「献身」、「憂碑」、「片雲」、「孤独の計」、「あそび」の五編。奥付の発行年月日は、昭和十三年

十一月二十日。

『早稲田文学』

佐々三雄の文学活動のホームグラウンドは、第三次『早稲田文学』であった。第三次といえ、坪内逍遙編集の第一次（明24・10～31・10）から現在刊行中の第八次（昭51・6）のなかでも、昭和九年六月から二十四年二・三月合併号まで続いたという、最も長期間発行されていた『早稲田文学』である。

ちょうどこの時期は昭和十年代、戦時体制下と重なり、雑誌の発行がさまざまな点で困難な状況であったにもかかわらず、よくそれに耐え得たことは、それだけでも十分賞讃に値しようが、内容面でも、編集と経営の責任者だった谷崎精二が、「戦時中も『自由主義最後の堡壘』たらしめることを秘かに期して編集、ほとんど時局に迎合せず、この姿勢は第三次の大きな特色」（講談社版『日本近代文学大事典』紅野敏郎）であることも留意しておきたい。

おそらくこれは、主宰者の谷崎精二の意向もさることながら、尾崎一雄、浅見淵、野村尚吾、逸見広などの、いわゆる私小説系の地味な作家たちが編集の中心にいたからこそ、もとよりその功罪もあろうけれども、なし得たことにちがいない。「時代思潮の動向に常に密接な関係を保つと共に、徒らに流行を追はず、常に穩健中正なる批判を試みる事は我等の当面の用意であり」とする「復刊の辞」の姿勢をほぼ一貫して保持したことは、時代が時代であっただけに特筆すべきであろう。

「復刊の辞」は続いて、「広く人材を求めて卓越せる作家批評家を文壇へ送る事は我等の誇るべき任務である」とも明言している。事実、同誌は毎月たんねんに同人雑誌評を行ない、毎年、二月号と八月号を新人特集号として新人の発掘と登用に力を入れた。この姿勢もまた、ほとんど最後まで貫かれた。そのため、早稲田系同人誌に拠っ

ている者にとっては、ことのほかこの新人号に登用されることが一つの目標となり、誰がいつ起用されるかが大きな関心の的だったらしい。

佐々三雄の場合も、むろんこうした経過を経て登場したことはない。すでに述べたように、まず、昭和十年二月号の同人雑誌評で担当の浅見淵に注目され、ついで翌十一年八月号・新人号でデビューとなった。作品は「孤独の計」。ちなみに同じ号で、のち第十三回芥川賞（昭和十六年上半年期）を受賞した多田裕計も「鳶笛」で初めて顔を見せた。

以後の『早稲田文学』と佐々三雄のかかわりは、別掲作品目録のとおりだが、一瞥すればやがて同人雑誌評の担当、文芸時評の執筆と、彼が同誌でしだいに地歩を固めていったことが瞭然とする。昭和十三年九月号で『文芸汎論』が、早稲田文学新鋭作家集を特集したときには、長見義三、野村尚吾、酒井松男、中村八郎、今官一とともに「代表」に選ばれたほど将来が囑望されたのだった。

宮内寒弥の調査（『早稲田文学』昭53・6）によれば、『早稲田文学』創刊号から昭和二十年十二月までに同誌の創作欄に載った創作の数（連載は一月月一個と計算）は、小説が五六六篇、戯曲が六篇、執筆者二〇九名。これを作家別に分類すると、連載を載せた逸見広の二〇篇や野村尚吾の十八篇、長見義三の十七篇は別格として、佐々三雄の九篇は、尾崎一雄、小沼丹らと並んでトップである。この一件から推察しても、佐々三雄と『早稲田文学』の関係はおおよそ見当がつく。

しかし、逆にいえば、作品目録が明瞭に語っているごとく、所詮彼は、『早稲田文学』の佐々三雄でしかなかった。浅見淵に愛され、期待され、私小説作家を重用した『早稲田文学』なればこそ、彼にも活躍の場が与えられ、重視されたのである。

ところが、前記『早稲田文学』（昭53・6）の「早稲田文学87年の節目」の特集座談会で、尾崎一雄がいみじくも、「書いたって鼻もひっかけないんだから」となげいているように、昭和十年頃からの私小説の評価は極めて低くかったとなれば、典型的な私小説作家であった佐々三雄の出る幕は、どこにも他になかったわけである。ましてあの非常時に、女・子供がどうした、こうした、無為だ、孤独だと御託を並べたところで、誰も見向きはしまし。彼のそうした姿勢や文学が、かえって光彩を放つのは、繰り返し述べてきたとおり、戦後になってからである。だが、戦後になってようやく『早稲田文学』から脱皮できるかに見えたとき、彼は念願を果せぬまま逝ってしまった。最後に佐々はつねに太宰を意識していながらついに太宰治になりそこねたともいわれるがその佐々三雄の「太宰治論」（『早稲田文学』昭16・3）を左に掲げてこの項を閉じよう。ちなみに、佐々三雄は太宰治より一年遅く生まれ、一年はやくこの世を去った。

太宰氏は、だいたいぼくらの年代のトップを切つたひとで、おそらく、多くのひとが、このひとに、先手をとられたやうな形になつたやうに思ふ。ひよつとして、ぼくなどさうかもしれない。（略）

ぼくに恐ろしく思はれたのは、このひとの、豊かな、恵まれた文才といふものであつた。ぼくは殊更、このひとの文才のみを買つて、なにやら世間の素人ども、田舎者どもが珍らしがってゐる、このひとのある種のことをひそかに排撃してゐたのであつた。（略）

しかしこのひとの、いつまでも続く手を代へ品を代へて立現はれる作品の創造力は、恐らく隠された努力もさることながら、何はともあれ敬服しなければならぬ。一見寡作風な作柄にみえながら、事実の上でのこのひとの案外な多作は、氏の外見に反して、このひとの内面の真率さを語るものであるかもしれない。（略）

こんな時代にあつて、太宰氏の文学がどんな風に持続し、継続されてゆくか、ぼくの最も興味とするところである。(略) どうも、ぼくには氏はよく判りすぎて、氏には一面識もないけれども、この余りに明瞭すぎる親近性が、ぼくに書くことをなくなせる。

作 品 目 録

昭和十年

- 1 峰 「早稲田文科」
 - 3 睹(未見) 「〃」
 - 5 憂碑 「〃」
 - 6 憂碑(二) 「〃」
- 昭和十一年
- 1 片雲 「作品」
- (※第一回新人コンクール)
- 8 孤独の計 「早稲田文学」

昭和十二年

- 4 あそび 「早稲田文学」
 - 8 懶惰の園(未見) 「朱鳥」
 - 8 同人雑誌評 「早稲田文学」
 - 8 同人雑誌評 「〃」
 - 9 同人雑誌評 「〃」
 - 12 献身 「〃」
- 昭和十三年
- 4 新屋(未見) 「朱鳥」
 - 6 良吉に就て(未見) 「〃」

- 7 神 「早稲田文学」
 9 夏衣 「文芸汎論」

(※早稲田文学新鋭作家集)

昭和十四年

- 1 葛西善三 「早稲田文学」
 (※小特集・葛西善三研究)
 3 新人は語る 「」
 5 文芸時評 「」
 11 文芸時評 「」

昭和十五年

- 1 同人雑誌評 「早稲田文学」
 2 同人雑誌評 「」
 3 富山雅夫君 「朱鳥」

(※朱鳥同人・富山雅夫追悼号)

佐々三雄素描

- 4 文芸時評 「早稲田文学」

- 8 新人論 「」

- 11 ある日の自伝 「」

昭和十六年

- 3 太宰治論 「早稲田文学」
 (※現代作家特集)

- 6 文芸時評 「」

- 10 秋に就いて 「」

- 12 家 「現代文学」

- 12 今年の記憶 「早稲田文学」

昭和十七年

- 8 文芸時評 「早稲田文学」

- 10 風の日 「」

- 11 文体について 「」

12 昔の人に 「新潮」

12 今年度の文壇の印象 「早稲田文学」

昭和十八年

1 批評 「早稲田文学」

(※小特集・作家の批評と評論家の批評)

2 思ひ出 「〃」

3 雑記帳 「〃」

10 戦線の友へ 「〃」

(※沖塩徹也宛)

昭和十九年

5 修業その他 「早稲田文学」

6 往く日は 「〃」

6 「雨蛙」について 「志賀直哉研究」

(※大正文学研究会発行)

11 内地にて 「早稲田文学」

(※11・12月合併号)

昭和二十一年

6 病人たち 「早稲田文学」

10 幼年の街 「新小説」

昭和二十二年

2 未来感覚へ随想へ 「風雲」

3 巡礼 「〃」

没後

23・9 天が下 「文壇」

(※『昭和二十二年傑作小説集』に収録)

日記へ遺稿へ 30・8 「山陽文学」

日記へ遺稿へ 31・4 「〃」

あそび△再録▽ 31・6 「新潮」

(※「忘れられた名作」特集)

日記△遺稿▽ 31・9 「山陽文学」

補注※未見の『朱鳥』発表作品については『早稲

田文学』△第三次▽の「同人雜誌評」から

推定。

二、佐々三雄の生涯

佐々三雄の生涯については、彼の作品の紹介をかねて、作品の一部を引用しながら追尋してみたいと思う。

「家」

Nの町を北から南へ、青溟色に流れた古い運河の川べりに、桂木の家は三代前からあつたやうだ。恰度、今どきのちよつとした家の系図が、たいてい戦国時代から始まるやうに、桂木の家も、おなじやうな戦国時代以後の系図を後生大事にかゝへ込んで、そのころの遺品とした槍のやうなものを、桐の箱にいれて蔵の奥へ仕舞ひこんでゐた。こんな家がまた大抵、明治の御一新に、夫々武家が市民化するために生活変革を迎へなければ

佐々三雄素描

三三

※『山陽文学』は、岡山市で出ていた同人雑誌。第一号は昭和二十九年七月一日発行。編集人は中務保二。中務によれば、佐々の死の翌年「先輩の浅見淵氏を経て、森田素夫から彼の遺稿全部を預かり、今日に及んでいる。」という。

ならなかつたやうに、この家も経済変革を迎へて、なにやら先々代の苦心になるといふ、特殊な繊維の染色法を特色とした、高々小さい資本の織物工場を、同族相寄つて始めたやうだつた。当時のさうした転身策のなかでは、これは割にうまくいつた例として、Nの町の古い人々にも記憶されてゐるやうだつた。尤も、それがどれほどの業績をあげたかどうかは知らないが、やがてそれがまた大して長つゞきもしないことになつたのは確かだつた。明治も末に近づいて、この国の新しい資本主義が隆盛を極めだすと、小資本の手工業に毛の生えたやうな工場などでは、いゝ潮時をみて早く見限つた方が、利巧だつたかもしれないのだ。かうしてぼくなどのまだ生れる以前、家はすでに親父によつて、二度目の転身を行つてゐたのだつた。こうした家の没落の段階といふものは、大凡そんな順をふむところから始まるのであらう。

この第二の転身に、親父は、べつだん新しいことを考へたわけではなかつた。

Nの町の北から南へ流れた、古い運河の川べりで、親父は最も平凡に、この地理的条件を利用することを考へたやうだ。つまり水運を利用する第二の商店が、ぼくらそろそろ末つ子たちの生まれるころ始められたのだつた。それはこの川沿ひでなんの珍らしい商売でもなかつた。べつだん創意も冒険も、飛躍も野心もなんにもなかつた。おそらくこゝに親父の凡庸と善良があつたのだ。尤もこの時代は、大正年間の時代の平穏さと相俟つて、この家にとつては最も穏かな太平の時であつた。

(『現代文学』昭16・12)

佐々家は、その昔名古屋の名産品の一つと数えられた、「さっさがすり」の織元であつた。名古屋市教育委員会編『名古屋の史跡と文化財』（泰文堂・昭45）の「佐々絣織元址」の項に――

佐々成政七世の孫、成信、名古屋堀川町に住み、寛政年中（一七八九—）木綿に飛白を織り出すことを発明したのに始まり、紺、浅黄、鼠薄柿等もっぱら時好に適することを研究し、文政年間（一八一八—）に至り世人佐々耕と称するに至った。明治十四年（一八八一）六月県令国貞廉平は久屋県立織物工場を佐々成重に下附し私立工場とし継続、明治十九年（一八八六）五月佐々成晴等相謀り下堀川町に佐々耕株式会社を設立、明治四十二年（一九〇九）十月愛知郡愛知町に移転した。愛知町のち名古屋市に併合、今の中川区西日置町六反学校東約一六〇メートル、水主町線路上である。

とある。

右文中、佐々成政とあるは、織田信長の時代、「清須の東方比良村」にあった比良城の城主。佐々成重が三雄の祖父である。また、佐々成晴は三雄の父、成義の異母兄。佐々家を継いだのは後妻の子である成義であった。

佐々三雄はこの成義とさんの三男として、明治四十三年三月七日、名古屋市中区下堀川町拾番戸に生れた。成義とさんの間には、長女・けい（明治二十七年生）、二女・錠（同二十九年生）、三女・乙（同三十二年生）、長男・成愛（同三十六年生）、二男・成鎮（同三十八年生）、四女・金子（同四十年生）、五女・いつ子（大正五年生）が三雄の他にいた。なお、母・さんは、熱田・羽城の殿様と呼ばれていた加藤家の娘である。加藤家は尾張の豪族で徳川家康が今川の人質になっていた頃、家康を今川から織田のもとへ連れさるとき、この加藤図書助順盛邸に一時幽閉したことで有名である。

父・成義が織物・染色業を廃して、「下堀川製材合資会社」を興した時期がいつであったかはよくわからないが、大正五年に小学校に入学した三雄の学籍簿の保護者の職業欄には、「製材業」とあるから、明治末期から大正

の初めにかけてであろう。しかし、これも大正十一年四月十三日に、父・成義が没したため廃業した。遺族の話では、その後しばらくは遺産の売り食いや貸屋の家賃収入で一家は暮したという。大正十二年に熱田中学校に入学した三雄の学籍簿の「正保証人」欄を見ると、保証人は長兄の成愛（戸主）となっており、職業の項目は、「無職」と記してある。

長兄・成愛は大正十年三月、愛知一中を卒業し慶応大学に進み、昭和二年高等部を修了した。その後名古屋に帰り、今池でパンションを経営、昭和四十六年に亡くなった。ついにながら次兄・成鎮は大正十三年三月、愛知一中を出て早稲田大学に進学、昭和六年に卒業して石原産業に就職。昭和四十年に没した。

この間、大正十五年九月八日付で、東区千種町堀ノ前三七（のち、大久手町三丁目十五番地に町名変更）に戸籍を移しているが、これは下堀川町の家を売り、新たにこの地に家を建てて移住したからである。ただし、前記熱田中学校の学籍簿の三雄の寄留先がこの住所になっているので、実際にここに住み始めたのは、父の没後まもなくではないかと思われる。

「幼年の街」

あの古川はNの市の北の端のお城の壕から南の端の港のわきまで、まっすぐにつづいてある川で、石炭ぶねや材木ぶねや縄でいはえた筏などが岸といふ岸にびつたりついていて夕方などには舟のともで赤坊をおぶつた船頭のかみさんがばたばた七輪をあふいでその煙がもううす暗くなつた川のおもての夕靄のなかにたちまよつて、むかふ岸の家々に灯がともると、月置橋の川下の方では川の水に点々と灯がうつつたものだった。あのこ

ろは夏の夕方などにはあそこではたくさん蝙蝠が舞つてゐた。川のうへでも前の道の電信柱のうへでも、見世の瓦屋根のうへでも、うちの方の玄関と門との間にたつてゐたせいのたかい五六本の棕櫚の木の裂けた葉つばのうへでも灰色になつた夕方の空を蝙蝠は、二匹も三匹もはたはた舞つてゐた。月置橋のはうから黒い鳥の絵をかいた行燈と四角な桶とをてんびんでかついだ爺さんが、二三丁もさきからきこえるやうな声で、くらうからすのびはゆうとうを売りにきたのもあのころだつた。あれは夕方から夜にしかやつてこなかつた。なぜあつた夏の晩にあんなちんちん沸いたお湯をうりにあるいたのかわからなかつた。あのころはよく夏の晩に幻燈会があつて月置橋のはうの子たちがたくさん集まつてきた。あれはみんな二番目の兄の友だちで、醤油屋の子や炭屋の子や月置橋のむかふの石屋の子などがゐるが、みんな上級生だつたので、じぶんはほとんど仲間にくはゝらなかつた。

(『新小説』昭21・10)

佐々三雄が生れ、育つた中区下堀川町は、町名からも推測できるとおり、堀川のほとりにある町だ。現在は松原町といわれる。

周知のように、堀川は福島正則が名古屋城の築城に際して木材や石を運ぶために開いた運河である。名古屋城から熱田の河口まで全長約七キロメートル、名古屋の中央部を北から南に流れている。下堀川町はそのほぼ中央の東岸の町であり、運河をへだてた西側は中川区となっている。

下堀川町附近、日置橋の南北数町にわたつて明治の頃は、両岸に桜の木が植えられ花見船も出た桜の名所だつたとのことだが、やはりなんといつてもここは名古屋の木場。このあたりから河口までの両岸は、製材工場や木工会社がびっしりと並び、運河には所狭しと材木が浮んでいる。下の方へ行けば筏をひく小舟が走り、熱田・白鳥町に

は福島正則以来の貯木場もあり、いまでも都会の真中ながらつり橋もある。

さて、下堀川町の大通りを一本越えた東の町は門前町。大須観音で知られる所であつては名古屋随一の盛り場。観音様の境内はいつも露店が店を張り、芝居小屋や活動写真館が周囲に林立していた。料亭も軒を並べ、観音堂の裏手には遊廓があつて、紅灯の街としても賑わいを見せた。

佐々三雄が入学した日置尋常小学校は、そういう環境のなかにあつた。いま、この学校は松原小学校と呼ばれる。大正五年四月一日に入學、卒業は十一年三月二十三日。高等科に一年学んでいるが、どこの学校かは定かでない。ただし、日置小学校に高等科が設置されたのは大正十二年四月だから、この学校でないことははっきりしている。

ところで、佐々三雄が幼年時代を回想し、語るときに必ず書くのが、彼が小学校に入る前に養子にやられたことである。たとえば、

闇につゝまれた東北の原野を、両親のもとから遠くはなれてゆく車中の光が、いつも深夜の警笛につれて思ひうかんできた。今では二十年といふ年月が、それをもう古い夢のやうに、色褪せた陰影しかみえない思ひ出してゐた。ながい旅につかれた身体を茫然と養父の膝によりかゝらせてゐた仄暗い車中の光、うすれた座席の色、見知らぬ私はそのなかに打沈みながら、母親からひとり遠く去つてゆく幼児の眼に、見知らぬ車窓の闇がなんの意味ももたなかつたとは云はさぬと、私はそれを自分をいたはる道具にし、自分のなかに憂魔のきざしたのをおそらくそのときからだと定めるのであつた。

東北の家からやがて再び実家に戻つた私は、幼時の数年を他家で過ごした為か、沢山の兄妹の中でいつかゆ

がんでゐた。自分の家で遠慮してゐる子供。ひ弱で憶病な小学生。直ぐの兄や姉の見えない迫害。出来ない中学生。病院通ひする疲れた身体。休学して友を失ふ早くからの孤独。——幼時の思ひ出に続くその一系列の私の失はれた過去の日がいつも私を物悲しい疲労でおほつた。

と、「愛碑」（『早稲田文科』昭10・6）で述べ、「孤独の計」（『早稲田文学』昭11・8）でも、「多勢の兄弟のなかで、末の方に生まれた彼は、乳呑児のころの三四年まつたく母親とも兄弟たちともはなれて、遠い他家でひとり子になつて暮した。そのためか、その後家へかへつてからも、妙に他人めいた遠慮があつて、それが大きくなるまでつゞいた。そしてそれが彼をひとり別なものにしてしまふのだつた。孤独の計といふ、早くから自分ひとりのものがあつて、それが深くくひこんで、ひととは真底から同化することができなかつた。」と言っている。

姉の金子さんの話では、三雄が行つた養子先は栃木県宇都宮市の遠い親戚。体が弱いという理由で帰えさせられたらしい。

佐々三雄は八人兄弟の下から二番目といつても、妹とは年齢が七つもちがっていたから、長い間末っ子だった。その彼がもっとも感じやすい学齢前に、一人、両親のもとを離れて他家に養子に出されたとすれば、その後の彼的人格形成にはかり知れない影響を与えたとしても不思議ではあるまい。彼が生涯、「孤独の計」を持ち、「ひととは真底から同化することができなかつた」のも、そうした幼時体験と決して無縁ではなかつたはずである。

「思ひ出」

中学の四年、五年が、私たち男にとつて、奇妙な、危険な年だらゐ、ひとは知つてゐるであらう。私はそれらの年を、非常に奇妙に、また危険に過した。詳細は口にする限りでないから云はないが、たゞ頻々と学校をサボつては図書館で日を過ごすことが多くなつた。私が翻譯ものにお目にかゝつたのはこの頃で、全く無知のまゝ外国の作家に飛びつくことが、どれ程退窟で面白くないことか、私はそのとき充分に味はつたことだつた。例へばモーパッサンの「女の一生」を十八位の男の子が読むといふことがどういふことか、それは暫く問はぬとしても、モーパッサンが何ものであるのか皆目知りもしないで、いきなり翻譯を恰かも義務の如くに読むことは、寧ろ読み続けることが苦痛だつた。尤も、同じやうな苦痛を味はひ乍ら、当時有名だつたゾラの居酒屋だのナ、だの、ツルゲネフの獵人日記、トルストイの我等何をなすべきか（！）などゝいつたものを実に面白くない想ひをして読んでゆきはしたが、思へばこれはまるまる虚栄のやうなものであつて、遂にそれらの中に照葉狂言の感激に比すべき一作も半作も見出すことは出来ない仕末だつた。そのくせ私はまるでドブへでもはまつたやうに、全身文学に似たやうなものでつゞ濡れだつた。そして中学四年の時、私は恐れげもなく校友会の雑誌に二十枚ほどの小説と称するものをのせて衆目を浴びた。題はあんまりのこと故云はないが、以来文学は私を離れないことになり、私はそのために段々駄目になつていつて、今では諦めたので、やつとこれからホントの仕事ができるかと思ふやうになつた。なにぶん少年期は今に至るまで続いてゐるのである。

（『早稲田文学』昭18・2）

佐々三雄が入った熱田中学校は、明治四十年四月、愛知県立第五中学校として開校し、大正十一年から熱田中学校と名称が變つた。それまで愛知県の県立中学校は、一中から八中までの八校あり、それぞれいわゆるナンバース

クルの伝統を誇っていたが、この年からそれを廃し、所在地の地名をつけるようになった。すなわち、二中・岡崎、三中・津島、四中・豊橋、五中・熱田、六中・一宮、七中・半田、八中・刈谷である。

ところが他校は一地方一校でさほど問題はなかったものの、名古屋は一中と五中の二校があり、しかも一中の方はそのまま愛知県第一中学校の名前を残したため、五中関係者がこれに激しく抵抗した。一中と五中は京都・名古屋にあって県下の秀才を集めたとはいえ、五中の一中に対するライバル意識は複雑であったから、その神経を逆なでするこの処置は、五中関係者には我慢できなかった。「これをめぐって生徒の間にストライキめいたさわぎがあったという。」（『五中・瑞陵六十年史』）し、熱田中学校と名前が変わっても、その年に発行された校友会誌の、「学校日誌」の記事でさえもこれについては一言もふれず、校歌・校旗・帽章・ボタンの類はすべて、「五中」のまままで通したほど、生徒も職員も校名変更にこだわったようだ。

佐々三雄が入学したのは、そうしたさわぎのあった翌年の大正十二年四月である。しかし、「大正十二年度 生徒学籍簿」の「在学中の履歴」の欄は、

第一学年修了 大正十三年三月二十一日

第二学年修了 大正十四年三月二十一日

第三学年修了 大正十五年三月二十一日

と記してあり、第四学年と卒業の項は空白となっている。「備考」欄も記載事項はなにもない。同窓会名簿にも該当年度（昭和三年卒業・第十七回生）はもとより、次年度とその次の年度にも見当らない。早稲田大学の学籍簿

は昭和三年、熱田中学校卒業と出ている。

この間の事情について、小学校時代も家が近くで熱田中学校も同級生の永田鋼三氏にきくと、「佐々君は三年か四年の頃突然学校へ来なくなってしまい、クラスの者にも理由は説明されなかったので、その後の消息はわからな……」との返事があり、前述金子さんにたずねると、「多分その頃だったと思いますが、三雄は肺侵潤を病み知多半島で転地療養をしていました。学校も休学したはずです……」と記憶しておられる。いずれにしても現在のところ真相は詳かでない。

さて、右の「想ひ出」で佐々は、四年か五年のとき校友会誌に小説を載せたといっているが、彼の在学が明白な、大正十二年四月から十五年三月までに発行された校友会誌を見るかぎり、小説や作文はおろか、各種役員や競技の記録にも彼の名前は載っていない。

同校では校友会誌『瑞穂』を年一回（大正十三年度から二回）校友会雑誌部が発行していた。内容は、論説・文苑・英作文・想華（詩・短歌・俳句）などの生徒の作品と、学校記事・校友会記事である。頁数は年一度で多いときは二百頁近い大部なもの。そのうち三分の二が生徒の作品で埋っている。佐々三雄の一年から三年までの間に、第十三号（大12・11）、第十四号（同13・9）、第十五号（同14・1）、第十六号（同15・2）の四冊が発行された。ついでながら、佐々三雄より二年先輩の本多秋五の名前は、第十一号（大10・11）に、「出立つ日 一丙 本多秋五」とあり、第十六号（前出）には、雑誌部委員を代表して、「大塚校長を送る」を書いている。同号では、「宇佐神宮参拝 一丁 都留重人」が目にとまった。なお、江戸川乱歩（第一回）、谷川徹三（第二回）も五中の卒業生である。

「献身」

事實彼の送つたものは、単にみたされない野望が、暗鬱な倦怠にかはつたばかりの、単調な、なにもない時間の流れだつた。自殺の失敗から小一年ほどして、彼が故郷を捨て、都会へ発つやうになつたときには、彼も一倍夢見勝な心で、壮大な運命を未来にえがいてゐたのであつたが、実はそれが彼をあやまらせたやうなものだつた。彼はどんなものへも手を出さうと思つてゐたのだ。そのころ若い学生群の間を流行のやうに風靡してゐたあの運動にも、彼はみるまに眩惑された。たゞ彼の偏頗な、正当への嫌悪といふものがなかつたら、そして周囲の事情さへ彼に適合してゐたら、彼はおそらく渦中にひきつりこまれたにちがひなかつた。たゞある高みに立つてゐることの方が、寧ろ彼の誇りにかなふといふ当時の仲間間の状況が、彼をつひに数少い例外にしたのだつた。もともと衆と共に行為するといふことの困難な彼には、実は芝居気しかみない、ひとの真顔らしい騒ぎに、一緒になつて同化することができなかつたのでもあつた。たえず大人の考へをじぶんに強要してゐる彼には、それらの事大的な秘密主義や、ひとをみたらスパイと思ふやり方が小賢しく見え圧制的な命令調子は断乎として氣にいらなかつた。多少誇大妄想的に、いつも大きなことばかり望んでゐる彼には、学生の運動といふものが小さく見えもしたのでつた。しかも独善的に、自覚に非ざる者ひとに非ず的に中央陣地をとつておしまはずやり方が、主流とか官軍とかいふものに対して神経的な反撥を感じる彼には、いよいよ氣にいらぬことになつたのだつた。彼はひとり光輝ある孤立を持しながら、ひそかに天邪鬼の快味をかんで、超然とした風をしてゐた。その内心は不幸でいつばいだつた。彼は友を得ることができなかつた。そして既に雄図の挫折した想ひが、じくじく心をかんだ。

（『早稲田文学』昭12・12）

佐々三雄が自殺を企てて失敗したのは、昭和三年のことである。金子さんは、「私の長男が生まれた年だからよく覚えています。ちょうど、まだ子供がお腹にいたときで、実家の方では大さわぎだったようですが、私には体のことを気づかかってすぐには知らせがありませんでした。三雄がどうしてそんな大それたことをしたのか、私にもよくわかりませんが……」と話された。

当の三雄自身も、右の引用文の少し前で、

もう十年も前、この世に始めて不可思議なおそれをいだいた少年のころ、奇妙な自殺の失敗を演じたときのことなどうかんできた。人気がない草原のうへに寝ころんで眼のうへに青い静かな空を仰ぎながら、死んでもいいと思つた最後の瞬間を、彼は特によく覚えてゐた。薬を飲むときには考へることなどなく、機械的な労作があるばかりだったが、飲み終ると草原のはうへゆつくり歩いていつて、木蔭に仰向けになつて寝ころんだのだつた。よく霽れた五月の日で、青い澄んだ空に白い雲がひと片浮いてゐた。(略) なのためだつたのか、彼は今でもそれをはつきり原因づけることができなかつたが、後で生き返つたとき、なぜかそれを予め知つてゐたやうな気がしてぞつとしたことを覚えてゐる。

と述懐している。

それから心機一転、翌昭和四年四月、次兄のいる早稲田大学へ進む。第一高等学院に入り、七年卒業。ひき続き文学部露文専攻に進学し、昭和十年三月卒業。露文科の同期卒業生は、佐々を含めて四人だった。

「献身」で、「そのころ若い学生群の間を流行のやうに風靡してゐた運動」とは、いうまでもなく共産主義運動

を指す。考えてみれば、彼が早稲田に在学した昭和四年から十年といえは、若い学生や知識層の間でマルクス主義運動が最も高揚し、そして急速に衰微していった時期である。佐々は運動の絶頂期と無惨な敗北期を同時に彼の眼で見てしまったのだ。

しかし、彼自身は、「あの運動にも」「見るまに眩惑された」けれども、もともと彼には「偏頗な、正当への嫌悪」があり、「衆と共に行為するといふ」ことが困難であり、「ある高みに立つてゐることの方が、寧ろ彼の誇り」になつていたので、渦中にひき込まれずにすんだ。のみならず、

私もまたできることならマルクスになつて、貴様たちはかうなり、お前たちはあゝなつてそれ以外に動きやうがないから、世界はかうなるといふ具合に、全世界をひと呑みにして「どうだね」とでも云つてゐたかつた。マルキシズムの人をとらへる魅力もそこにあるにちがひないのだ。権力への渴望がそれである。なにもかもそれで断ちきれて安心ができるのだ。安心立命を願はない者がおるか。マルキストも亦どうやら小市民の典型らしく、マルキシズムは頑としてマルキストをも押さへこんでゐるのである。権力への渴望にかられて出かけていつた者が、やがて鋭い無力の感情でひきかへしてくるのだ。それが転向といふものにちがひない。世界を動かしてゐるものはなんといふ簡単なものだらう。自分はそのなかの例に洩れない単なる一個だ。

（「憂碑・二」『早稲田文科』昭10・6）

と、この運動とそれに群がった者たちを醒めた眼でながめていた。そういう彼の態度に、同世代の平野謙（明治四十年生）はひそかに注目し、親近感を抱いていたと回想している。佐々三雄と同じ四十三年生れには、保田与重

郎がおり、一年前に太宰治、平野謙と同じ四十年には高見順や亀井勝一郎がいる。『近代文学』派の平野・本多秋五・植谷雄豊らもほぼ同じ頃の生れだ。いま、これらの文学者が、彼らの若き日にいかにしてマルクス主義運動にかかわり、その後いかなる歩みをしたかを想起すれば、一人醒めていた佐々三雄の行動と思考がいかに際だっていたかは明白であろう。と同時に、平野謙の文学的閱歴を省察すれば、彼がひそかに佐々三雄の『献身』一卷を愛読していたというのにも納得できるではないか。人々がマルクス主義を絶対化しているとき、つとにそれを相対化してながめ、その運動とそれに携る者の実態を看破していた佐々に、平野は目を見張っていたのである。とすれば戦後の平野が共産党と一線を画し、組織と人間性の問題を執拗に追求したのも、佐々を高く評価したのも理解できよう。

「夏衣」

裕次は奇妙な家へきたといふべきだつた。日のたつうち、蘭子の前身は、ぼんやりわかつていった。それは妙なものだつた。早速にはそのまゝにも受がへかねた。

「わたしたちのときには、そんなことが流行つたんですよ。」

と蘭子はいった。かの女は、ある若くて死んだ、病身な詩人と、数年近く生活を共にしてゐたのだが、それがたゞ兄妹のやうにすぎたのだといふ。そして詩人が一年ばかり前、肺で死んで、かの女はやつと解放されたのだとか、かの女は解放といふ言葉をつかつた。知り合つて間もない婦人と、余り機微にふれる話にはいる具合悪さに、裕次は当らずさわらずの手控えの手だつたが、蘭子はどうかして、納得させやうとするけぶりだつた。蘭子はそんな類のことまで喋るやうになつてゐた。(略)

蘭子の話を綜合してみると、まだ大学の予科に在学してゐた矢島が、卒業まではさうしたことの無いやうにと、多少は年少のロマンチックな美意識もあつてか、始めにさうした協約を結んだのだが、それがそのまゝ續いてゐるうち、蘭子はいつか矢島をうとましく思ひ始めていつたのだつた。(略)

蘭子は、それかとて別れ去ることもできないで、不自然な共生生活を続けながら、その間なん度も国へ帰つてゐたり、目白の方へ毎日絵を習ひに出たり、手芸の講習に出たりして、家では細かいことからかく矢島に突かゝるやうにしたりして、冷たい変則な生活を送つたやうだつた。矢島が学校を卒業するやうになつてからも、二人の間の垣はもうどうすることもできないやうになつてゐて、やがて矢島の病氣が、二人の間には却つて救ひのやうに現はれてきたのだつた。矢島はしかしその間にも、終始、生前残していつた一巻の詩集の類のなかに、蘭子の優艶の讚歌を、たえず一筋の糸のやうにつゞけていつたのだつた。矢島は結局その病氣で死んだのだが、薄幸な詩人として、彼は自身の清純な思慕を、最後まで全うしたといふべきだつた。矢島の憂悶の一端は、蘭子の言葉のはしからも伺へたが、蘭子が矢島にとつていい女性だつたとはいへないやうだつた。矢島の困惑は想像に難くなかつた。無理に襲へば強姦だからな、とそんな言葉も吐いたといふ、きゞづらいことだつた。矢島が病氣になる前あたりは、蘭子の焦燥もひどかつた。矢島には時に憎悪をもつて、そんな間のまゝの行先に狂燥した容子だつた。矢島が病氣になつてからは、「あれを身を粉にするといふんだわ」といつたが、なにか義務の観念で身を粉にして看病し、それを恩返しにして、癒つたらはつきり別れやうと思つてゐたのだといつた。矢島もそれを知つてゐたといふ。矢島は死んだのだつた。二年連日の看病で、矢島が息をひきとつたときには、蘭子はたゞ乾燥した感情で、冷淡に笑ひ出しかねない容子をして、ひとびとから情操をうたがはれたといふ。

(『文芸汎論』昭13・9)

前田みつ子が下北沢に借りていた家に、佐々三雄が初めてやってきたのはいつの頃だったであろうか。恋人と死別した彼女は、田舎から上京してきたすぐ下の妹と物理学校に通う弟とで一軒の家を借りた。が、三人では広すぎるし、もったいないからと適當下宿人を探していた矢先に、佐々三雄が現われたのである。

前田みつ子は、明治三十七年十二月二十一日、鳥取県東伯郡矢送村（現・関金町）に生れた。祖父は数学者、父は小学校の教員でのち校長になった。彼女は女六人、男四人の六番目、三女である。

小学校の教員の身で十人の子供を持ち、しかも先生の子とあれば、女中や丁稚に出すわけにもいかず、相応の教育もしなければならなかったから家の暮しむきは決して楽ではなかった。そのためみつ子は、京都で先生をしていた長女を頼り京都の精華女学校を卒業した。大正十一年三月のことである。

この女学校時代の友だちの姉が平林英子と仲が良く、みつ子も英子と親しくなった。英子は二つ年下のみつ子を妹のように可愛がってくれ、みつ子もよく英子のところへ遊びに行った。英子はその頃三高生の中谷孝雄と一緒に暮らしていたので、中谷の周囲の三高生たちとも自然に知り合い、彼女はいつとはなしに彼等のアイドルとなった。

しかし、彼女が激しい恋の炎を燃やしたのは彼等三高生の一人ではない。やはり中谷の友人であったが恋人は早稲田で学んでいた。相手の名前は稲森宗太郎。中谷の中学時代からの親友で、大正十年、三重一中を経て早稲田の第一高等学院に進んだ。同期に尾崎一雄や稲垣達郎がいる。

短歌雑誌『楓の木』の創刊五十年記念号（昭52・11）で、稲垣達郎は、

稲森宗太郎は、あとでこそ歌一本槍になったけれども、そもそもは多彩なめずらしい才能で、一時、劇に熱心で、美津子夫人とのむすびつきも、それにかかわるところがあることを、稲森も最初同人であった、梶井基次

郎、外村茂（繁）、中谷孝雄らの雑誌「青空」の外村が話していた。戯曲もいくつか書いた。島村民蔵さんが主宰している早大劇研究会の、早大正門前の稲門堂書店から出した同人の作品集にも入っていた。しかし、みなやや後に知ったことである。でも、小柄で、悪くいえばいくらか猿面の、赤毛を長く垂したこの青年の存在は早くから知っていた。

（「水引の花」）

と、学院時代の稲森宗太郎を回想している。前田みつ子が、この「多才なめずらしい才能」を識った経緯は、中谷孝雄の『梶井基次郎』（筑摩書房 昭36）に詳しいので、次に引用する。

姫路にはこの春京都の女学校を卒業したばかりの人で、私が英子と一緒に暮してゐた頃にはよく私たちの所へ遊びに来てゐた女友達がゐた。彼女はゆるゆる文学少女で、姫路へ帰ってからも時々私のところへ手紙をくれたが、私がこの日頃の憂鬱な毎日のことをかくさずいってやると、暫くこちらへ来て静養してはどうかと勧めてくれたのだった。かうして私はその人の家に客となることになつたのであるが、今から思へば全く厚かましい話だった。

しかし彼女の家では、意外に私を歓待してくれた。私は彼女のもとで十日ほどぶらぶら日を送ることになつたが、その時私がついていった『自画像』といふ雑誌が機縁になつて、やがて彼女は稲森宗太郎と結ばれることになつた。『自画像』といふ雑誌は、私の中学の後輩（といつてもほんの二年か三年であるが）で当時早稲田の高等学院にゐた稲森や寺崎浩や岩津資雄や、それから他に物理学校にゐた中谷太郎（私の従弟）らが同人になつて出してゐた文芸雑誌で、私も小説を寄稿したことがあるが、なんといつても稲森の活躍が最も花々し

く目ざましかった。彼は後には歌一筋の道をたどるやうになったが、当時はいはゆる往くとして佳ならざる才人で、歌、俳句、詩、小説、戯曲、なんでも一応は器用にこなした。私が姫路へ持っていった『自画像』（第何号であったか）にも彼は数首の詩と二十首ばかりの歌を出してゐたが、それにすっかり彼女——前田美都子は魅了されてしまったのだった。

彼女はいちど稲森に逢つてみたいと私にねだつた。幸ひなことに、この春海軍兵学校を卒業した彼女の兄が近く横須賀から遠洋航海にのぼるので、彼女はそれを見送りにいくことになつてゐた。彼女はそのついでに東京へ行つて稲森を訪ねたいといふのだった。私は気軽に彼女の希望をいれ、すぐ葉書で稲森に彼女のことを知らすと共に、彼女には別に紹介状を書いて与へた。やがて私は京都へ帰つたが、それからまもなく彼女も上京して稲森に逢ひ、すぐその日から二人は同棲することになった。どうしてこんなことになつたのか、その素速さに驚かずにゐられないが、そのかんの事情については私は今以つて何も知らないのである。

姫路には二番目の姉が軍人の妻として嫁いでいた。みつ子は女学校を卒業したあと、この姉の所にしばらく身を寄せていた。中谷孝雄が書いてあることについて、みつ子さんにたしかめると、「稲森とどういうきっかけで知り合つたかは、もうすっかり忘れてしまいました。ただ、初めて会つたのは、兄を見送りに行ったときで、東京ではちやうど平和博覧会が開かれていたことだけはよく覚えています……」とのことであつた。年表を調べると、上野で平和記念東京博覧会が開催されたのは、大正十一年三月十日から七月三十一日までである。

「中谷さんがお書きになつてゐるように、そのまま稲森さんと暮されたのですか」とたずねると、みつ子さんは「いいえ、文通などはしていましたが、すぐ東京へ行ったものではありません。たしか、東京へ出たのは震災の次の

年の正月頃ではなかったかと思ひますが……」と答えられた。そして、「まあ、いまの人達には理解できないでしょうが、私たちは一緒に居たといつても、私はまだ女学校を出たところで二十才そここの娘でしたから、結婚とか、いまでいう同棲とかいつた関係ではありませんでした。その点、稲森も潔癖だったというのでしょいか、私たちが幼かったというのでしょいか、まちがいがあつてはいけなひといつて、東京に家のあつた外村繁さんや寺崎浩さんの所などに預けられました……稲森が『槻の木』の編集をやるようになると、私もそれを手伝つたり、窪田空穂先生のまわりの若い人達が多勢出入りされ、そういう方たちの文学談義を聞いているのが、とても楽しいことでした。」と続けられた。しかしそれもつかのま、稲森はまもなく胸を病んで床についた。彼女は必死に看病したが昭和五年四月十五日、三十才の若さで帰らぬ人となつた。同年八月友人たちによつて遺歌集『水枕』が編まれた。前田みつ子によつて稲森との永遠の別れは、彼女の青春との別れであり、文学少女からの脱皮でもあつた。二十七才、もはや「少女」の年齢はとうに過去のものとなつていた。そこへ登場したのが、二十才を越えていくらも経つていない瘦身の文学青年である。彼もまた稲森の後輩だつた。

一方、佐々三雄によつても、

早くからの諦め顔。「彼奴はなんだ」といひたげなひとの眼。——彼はさうしたものは多く冷たい他人主義をとり、たまたまものをいふ友には単に丁寧にしてすごした。彼のたよるものはいば沈んだニヒルであつたが、その裏は激しい何ものかへの渴望だつた。彼は徒らに用ひやうもない自分をもてあましてゐたのだつた。(略)で、彼はいよいよ為すことがなかつた。嘗つて失敗した自殺を、彼はながい間、思ひこんでゐただけ思ひ起すこともなかつたのだが夜な夜な友もなく時をすごさなければならなくなると、いつかそのころ始めてお

とづれたやるせない厭世が、親しい気持になつて思ひかへされてきたりした。彼は既に心破れたひとの、うかぬ顔して日々を待つた。お美代が出てきたのはさういふときだつた。
 (「献身」)

こうして二人は結ばれ、「お美代の献身と情熱が所在ない彼を引張っていき」やがて子供が生れた。昭和八年九月十日、ごろ合せのような日に、長女・邑子が誕生した。それは二人にとって茨の道の始まりでもあつた。

「秋に就いて」

このごろの住宅払底で、暫くはこの露地裏の二階も、どうやら越すわけにゆかないらしい。今度はまた子供が出てきて、子供とその母と、親子三人、どうみてもこれは仮の住家だが、そんなとまり木にとまつたやうな暮しを、これで自分などは、案外よろこんでゐるかもしれやしないのだ。転々とそちこち移り住んで、いつ落付くあてもない暮しが、いつそ悦びなのかもしれない。(略)

もう九ツになる女の子が、たつたひとり縁側の手摺にもたれて、所在なげに楓の樹をみてゐる。……なにを考へてゐるのか、この子供も、いろんな土地を歩いてきたものだつた。――

かの女は、一年半ほども田舎の老婆の家に放つたらかさされてゐて、いつまでもさうしておくことにも耐えかねた母親に、こんどやつと連れもどされてきたのだつた。そろそろ顔の表情もしかと浮んでこないやうな日の朝、子は母についてやつてきた。一年半の向ふから、始めてあはせる父の顔を、子供はまともにもみることができず、始め一日は襖のかげにかくれたりし、哀れだつた。不肖の父うらむ術も知らぬ子のはにかみは、父には

不懲ないとしげなことであつた。

やがて秋がやつてくると、こゝももうそろそろ一年になるが、このごろはやつと、次の暮しおもふこともなく、穏やかだ。

子供の母は、こゝから毎日働きに出、自分も日々の食糧のためには、一日の大部の時間を割かねばならなかつたが、これはどういつても致し方のない話だし、自分はなるべく顔をそむけるやうにしてゐるのだつた。いまださらこだはつても、仕方のないことだ。

こうして、いはゞ塵のなか、ひとなかにもぐり込んで、じつと目にたゞないやうにしてゐれば、それほど罰があたるとも思はず、自分の存在も赦されるかとおもふのだ。人間赦免を願ふことほど、心をおちつけてくれるものはない。さびしい、胸ざひのするときは、たゞたゞ謙虚になるのが手なのだ。

(『早稲田文学』昭16・10)

佐々三雄とみつ子の十余年間は、貧困と放浪に明け暮れた、昔ながらの不遇の文学青年の典型だった。とにかく親子や夫婦が離ればなれで暮していたときの方が、一つ屋根にいたときより長く、特に娘はその子供の時分のほつんどを、実家や姉たちの所で預かってもらったとのことだから、この家族がなめた辛酸はおよそ想像を絶しよう。そもそも佐々の表現を借りれば、「お美代とのつながりも、単に退屈に始まったもので」、「お美代の献身と情熱が、所在ない彼を引っ張っていったようなもの」(「献身」という、文学青年にはありがちなかたちで二人の生活が始まり、そのうちに子供ができて生活苦にあえぐお定期的のコースを、彼と彼女も歩んだのである。

いうまでもなく二人を、小なりといえども城主の血を継ぐ佐々家は許さなかつた。なかでも自身も由緒正しい家

柄の娘である彼の母が、みつ子を嫁として認めるはずもなかったから、覚悟のうえとはいえ、彼女の心中は察するに余りある。

そのうえ、夫に生活能力があり、せめてその意欲でもあれば救われようが、これがまた文学を志す者ならば誰しものことだが、いよいよ大学を卒業する段に及んでも、「私自身就職の意志のないことを知つてゐる。私は、当もない自分の文学以外に、私がどうする積りでゐるのか自分で知らなかった。」（「峰」）といっている始末だ。

これでは、「私だからどうなるのかも判らず、妻は子供を連れて他家に服従した日を送り、それに破れて今又、山陰の山奥へ、当のない日を待つために帰つて行かなければならぬのだつた。」（同前）のも無理はない。彼女は乳呑児をかかえて、姉の所や実家に身を寄せる生活を余儀なくされたのである。

もっとも、浅見淵の「佐々三雄を悼む」（『早稲田文学』昭22・9）には、

佐々君は終戦間際まで、本郷の或る大きな医療器械店から出してゐる医事新報（？）といった週刊誌の編集をやつてゐた。そこへは逸見広君の口利きで這入つたのだが、確か七年ぐらゐ勤めてゐたと思ふ。

（※『雑誌年鑑・昭和十七年度版』を調べると、『医事週報』が該当する。ただし昭和十五年八月創刊である）

と出ている。その点をみつ子さんに聞くと、「たしかにそんな所に勤めていましたが、私は戦争がだんだん激しくなつて、岡勇（前述）さんのお世話で京都の西陣の方へ娘を連れて行きましたから、そのへんのこととはよく覚えていないのですが……」といわれた。

みつ子の生活もこうして変転きわまりないものであったが、原稿を書いては破り、破っては捨てていた佐々三雄

もやはり、東京のあちこちを転々としたのである。その足どりは現在のところ判然としてはいないけれども、彼から早稲田大学の校友会に報告のあった住所などをたどると、判明しているのは次のとおりである。

昭和十年三月(?)

淀橋区戸塚町二一七二 千葉方

(※ 校友会原簿)

昭和十一年十二月

中野区江古田四一―一四七三

(同右)

昭和十三年五月

淀橋区諏訪町二四 尾口方

(同右)

昭和十五年十一月

本郷区弓町一ノ一九 東台館

(※「早稲田出身文士録」『早稲田文学』昭15・11)

昭和十六年五月

牛込区通寺町九

(※ 除籍簿、このとき分家)

ところで、佐々三雄とみつ子の生活は、すでに述べたとおり、こうした貧困と放浪の明け暮れだったにもかかわらず、際立っているのは、

「でもあたしは構はないの。」と妻は云った。「なんでもないわ、そんなこと。……ただ、あなたが偉くなってくれたらと思ふの」

(「峰」)

と、ひたすら夫を信じ、夫が「偉くなってくれたら」と妻がよくこの生活に耐えたことである。いまではもうすっかり死語と化してしまったが、「苦節何十年」という言葉がこの夫婦からは彷彿としてくる。文学に賭けた夫と妻の苦闘の物語が鮮かに目に浮び心打たれる。

佐々三雄が、右の引用にある病氣にかかったのは終戦の年の夏。二カ月半の京大病院での入院後、再発したのが翌二十一年の暮。

佐々君から最後の便りを貰つたのは、去年の十二月であつた。その中に、「一週間ほど前からどうも冬がいけないのかまた病氣が再発してきまして、片眼眼瞼が垂れ下つて眼が見にくく、呼吸困難と、とかく首筋の筋肉が縮むやうに感じられて、原稿書きもつひ苦痛になります」とか、「正月も目前ですけど、身体がこの調子では、どのやうな正月がくるやら、お湯へ行くのにも注射打つて出かけるやうなしまつでは、到底酒の方も駄目かと、よくよく何かに呪はれてゐるやうな氣がしてやりきれません」とか、かういふ文句があつた。

(前出「佐々三雄を悼む」)

それから二カ月後の、昭和二十二年二月二十四日、入院先の京大病院で急逝した。三十七才の若さである。文壇への本格的な登場がまさにならねられたとした矢先、ついにそれを果せずじまいで逝ってしまった。

参 考 文 献

- 浅見 淵 同人雜誌評 『早稲田文学』10・2
浅見 淵 早稲田の新作家達 『文芸汎論』13・9 (『現代作家論』赤塚書房 昭13に所収)
森田 素夫他 献身出版記念号『朱鳥』14・2 (別掲参照)
鍛冶 賢治 「城のある町にて」と「献身」 『文芸復興』17・8
宮内 寒弥 文学的交友録 『現代文学』17・9 (『文芸手帖』文学祭社 昭21に所収)

佐々三雄素描

五八

- 浅見 淵 『佐々三雄を悼む』 『早稲田文学』 22・9
 中務 保二 遺稿について 『山陽文学』 30・8
 平野 謙 同人雑誌評 『文学界』 30・10
 浅見 淵 佐々三雄について 『新潮』 31・6 (「あそび」再録の解説)
 平野 謙 佐々三雄のこと 『毎日新聞』 45・9・22 (『昭和文学私論』毎日新聞社 昭52に所収)
 浅見 淵 「早稲田文科」の同人 『早稲田文学』 48・4 (『史伝早稲田文学』新潮社 昭49に所収)
 収録文に一部ふれてある単行本。
 浅見 淵 『市井集』 砂子屋書房 昭13・12
 田畑修一郎 『文学手帳』 三香書院 昭18・8
 浅見 淵 『昭和文壇側面史』 講談社 昭43・2
 平野 謙 『作家論』 未来社 昭45・10
 浅見 淵 『浅見淵著作集一卷』 河出書房新社 昭49・8
 尾崎 一雄 『あの日の日・下』 講談社 昭50・1
 野口富士男編 『座談会 昭和文壇史』 講談社 昭51・3
 長見 義三 『白猿記』 北海道新聞社 昭52・10
 諸 家 『早稲田文学87年の節目』 『早稲田文学』 昭53・6
 資料・浅見淵・「同人雑誌評」

一月の同人雑誌の小説を通読して、初めて見る名前でも最も感銘が深かったのは、佐々三雄氏の「峰」(早稲田文科)と、菊池美和子氏の「波動期以前」(今日の文学)であった。「峰」は妻子を京都の親戚に與けて、東京で孤独な生活を営んでゐる貧しい作家志望の青年の生活が描かれてゐるのであるが、深い寂寞感を味ひ乍らも、絶えず新鮮な希望を持ちつづけ、しかも頽廢に触まれぬ、相当練れた主人公の心境が出て居り、好感を抱かせるのだ。そして、これは同時に、作者自身の人柄だらうと思つた。後半の京都の親戚を叙したところも、擬勢が無く、俗人を蔑視せずして愛情を以て接してゐるところ、作者は却々大人だと思つた。筆致も確かさがあり、それでいて素朴さもある。難を云へば稍々筆力が弱いことであるが、その

代り、一種の粘り強さがある。しかし、最後のけはしい山路で、これからの人生行路を象徴したところだけは、作者の意図に反して失敗してゐた。そこだけ遊離して観念的になつてゐるからだ。作者の人生観照に一步深みを増し、苛烈味が加わって来たら、相当手ごはい作家になるのではないかと思ふ。期待していゝ作家である。（『早稲田文学』昭10・2）

附 記

拙稿を成すにあたって本文記載のほか次の方々には大変お世話になりました。記してお礼申しあげます。

佐々初江 烏殿みち子 市川為雄 石川利光 堀尾幸平 矢谷憲一 近代文学館